



Title	<図書紹介> ウォーレン・バックランド著 前田茂・ 要真理子訳 『フィルムスタディーズ入門』
Author(s)	橋本, 英治
Citation	デザイン理論. 2007, 51, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ウォーレン・バックランド著 前田茂・要真理子訳

『フィルムスタディーズ入門』

晃洋書房 2007

橋本英治／神戸芸術工科大学

『フィルムスタディーズ入門』は訳者があとがきに記しているように、Teach Yourselfのシリーズの一冊として出版されています。初出は1998年ですが、改訂版は2003年となっています。この手の書籍は数年で絶版となる中、息の長いものとして受け入れられているようです。読者対象は映画を学ぶ入門者（特に大学生）です。

映画理論、歴史書の翻訳が刊行される度に、必ずと言っていいほど繰り返される決り文句があります。日本には授業に使える平易な映画研究書、入門書が少ないとの弁です。2004年に同じ晃洋書房から刊行された『ワールド・シネマ・ヒストリー』（アンドレア・グローネマイヤー著 豊原正智・犬伏雅一・大橋勝 訳）でも同じ事情が述べられています。他にも枚挙のいとまがありません。なぜ、これほど映画理論・歴史の入門書が恒常的に欠落しているのでしょうか。

このことは本書序章の最初クリスチャン・メッツの引用がある種正鵠を得ていると思います。

「映画を研究するだなんて、なんと馬鹿げた考えだ！」

研究とは体系立てて確定したものを記述する試みです。ところが、映画は、アナログからデジタルへと進化し変容しています。温故知新と言うよりは千変万化、日進月歩の表現形態です。それを研究という静的な体系に固定することは元々無理な試みなのかもしれません。そして、映画は見るものであり、その映画の体験があつてこそ、映画について語る（研究すること）が始まります。また、

読者が若い人であれば当然、研究対象も最近の作品でなければなりません。自分の生まれる前の作品を語られてもリアリティはありません。『フィルムスタディーズ入門』は若い読者を映画の体験へと引き込むための新手の手練手管が次々と示される指南書です。

構成は次のようになっています。

序文

第一章 映画美学 — フォーマリズムとリアリズム

第二章 映画構造 — 物語と語り口

第三章 映画の作家性 — 作家としての映画監督

第四章 映画ジャンル — 典型的な映画作品を定義すること

第五章 ノンフィクション映画 — 五種類のドキュメンタリー

第六章 映画の受容 — 映画批評という技術と職業

もっと知りたい人のために

序章での一章から六章までの要約は実に明快です。この章を読むだけでほぼこの書籍の全容がわかります。要約の要約を試みますと、六つの章の構成は、大きく二つに分けられます。一章から三章は「映画への内在的アプローチ」、つまり「一切の歴史的、道徳的、あるいは社会的な文脈から切り離れた上で映画作品そのものを研究する」ことです。四章から六章は映画の外側に向かうアプローチ、つまり「映画作品と、この映画作品の外にある現実の特定の局面との関係」、 「映画作品を

歴史的・社会的な文脈のなかに置く」ことで。この二つのアプローチによって、その切り口の違いが六つの章に現れると考えられます。

そして、それぞれの章のテーマに即した映画作品が非常に絞られた形で数点挙げられています。映画作品列挙の数が少ないこと、これは映画研究入門者にとって有難いことです。ここで主な作品をざっと拾い上げてみます。

『ジュラシックパーク』『三つ数えろ』『タクシードライバー』『北北西に進路をとれ』『心のともしび』『パルプ・フィクション』『マルホランド・ドライブ』『ブロンド・ヴィナス』『石炭の顔』『高校』『ロジャー & ミー』『カメラを持った男』『シン・ブルー・ライン』『イングリッシュ・ペイシエント』『マイノリティ・リポート』

わずか15本です。新旧取り混ぜて『マルホランド・ドライブ』といった新しい、そして、不思議な作品も登場しています。『マイノリティ・リポート』の公開は2002年です。その上、難解で眠くなる作品が少ないことも特徴です。どの作品も映画鑑識眼を持たずとも単純に楽しめます。読者が気軽に共通の映画体験を持ちえること、これは非常に重要です。当然、出版社はイギリスであり、日本では見ることが難しい作品も登場しています。しかし、例としてあげられる映画の数が少ないことで、それぞれの映画に対して、その説明が非常に丁寧になされています。あたかも、映画を見ていなくても、見たような気にさせる文章表現技術には関心させられます。そして、映画を見たくなるように仕向けられているのです。

多くの映画研究書籍では、鑑賞することが不可能に近い映画作品が散発的に列挙されてきました。映画を専門に研究している人々や熱狂的な映画ファン以外は、そうした映画作

品の連射に退屈以外の何物も感じません。知らない言葉は辞書を引けば理解できますが、未知の映画はその作品を見なければなりません。真面目な読者がその映画を見ようとする、厳しい修行、遙か彼方、東京のフィルムセンターまで巡礼の旅が始まります。そうした蟻地獄に落ち込まぬよう、映画を楽しむことから始める著者の姿勢には好感が持てます。

もう一つ特筆すべきことがあります。この書籍では映画理論を勉強する上で一番問題になっている文献（一次資料）入手の困難さを解決しようと試みていることです。

他の映画研究書籍と同様に序章から五章まで章末に基礎資料としての文献目録が示されています。残念ながらこうした文献は邦訳が少なく、それに相まって訳出された書籍は絶版が常です。また、原書は映画を研究している専門機関、大学、図書館に行かなければ手にすることができません。例えば、第一章の基礎文献である『映画とは何か』（アンドレ・バザン）は今となっては大きな図書館を訪ねることでしか読むことができません。そういう文献探しの努力は映画の勉強を始めた人々にとっては酷であり、その時点で意欲を失うものです。文献はあくまでも映画を思考するための補助手段でしかありません。

その答えを著者は出しています。「もっと知りたい人のために」という付録の章で示されるインターネットでの映画研究がそれです。さらに、第六章「映画の受容」でも、映画の批評のソース（情報源）をインターネットから得ています。

本書は映画研究の敷居を下げる、大きさにならないこと、常に新しい情報を提供すること、そのことを意図した映画研究の啓蒙書だと思われます。